

ダバ語の名詞句と修飾構造

白井 聡子

0. はじめに

本稿では、ダバ語（中国四川省：チアン語支）の名詞句構造を記述する。まず、第0節でダバ語の概要および基本構造を概説する。第1節では、名詞句の構造を述べる。第2節では、名詞修飾構造について、形容詞句による修飾、節による修飾、名詞による修飾の3つに分けて述べる。第3節でまとめる。

0.1. ダバ語について

ダバ語は、中国四川省西部、カンゼ・チベット族自治州（甘孜藏族自治州）の道孚県南部から雅江県北部にかけての地域で話されている（地図1）。話者数についての統計はないが、Huang (1990), Gong (2007) などの記述から、約8000人と推定される。言語系統としてはシナ＝チベット語族チベット＝ビルマ語派チアン語支に属すると考えられる。大きく北部方言群と南部方言に分かれる。

本稿で記述対象とするのは、北部方言群に属するメト方言である。仲尼郷麻中村で話される方言で、村の人口は約260人である。



地図1 ダバ語の話される地域

0.2. ダバ語の基本構造

ダバ語の基本構成素順はSOVで、3項動詞の場合は、S IO DO Vとなる。後置

詞型である。接辞については接頭辞と接尾辞の両方があるが、接頭辞は種類が限られている。

文法関係は名詞に後置される格助詞によって表示される。格表示パターンは主格対格型で、主格はゼロ表示である。主な格助詞としては、 $=wu$ （対与格：ACC）、 $=ji$ （受益格：BEN）、 $=la$ （与位格：DAT）、 $=k\Lambda\Lambda$ （具格：INS）、 $=n\Lambda$ （共格：COM）、 $=ntsha$ （比格：COMP）、 $=r\Lambda$ （属格：GEN）などがある（白井 2010）。

述語の構造は、名詞述語型と動詞述語型に大きく分かれる（白井 2013）。名詞述語文には、コピュラないし文末小辞が用いられる。動詞述語文では、助動詞が動詞に後置されうる。動詞語幹には、方向接頭辞、否定接頭辞、アスペクト接尾辞などが付加されうる。

他の多くのチベット＝ビルマ系言語と同様、ダバ語にも文末助詞（SFP）がある。主なものとして、 $=re$ （陳述）、 $=a/=ra$ （疑問）、 $=me/=me$ （真偽疑問）、 $=sa$ （驚嘆）、 $=te$ （伝聞）、 $=pa$ （推量）、 $=mo$ （確認）、 $=z\Lambda$ （申し出）などがある。

0.3. 先行研究

ダバ語の名詞句を中心的に扱った先行研究はない。名詞修飾節については、拙著（Shirai 2013b）に記述がある。文法構造に関する先行研究としては、次のようなものがある。Huang（1990, 1991）は、北部方言群の一つであるダト方言の文法概説である。Gong（2007）は、南部方言の文法書である。また、メト方言の文法を扱った一連の拙著（Shirai 2006a, 2006b, 2010, 2013a など）がある。

1. 名詞句の構造

名詞句は、動詞の項になることができ、また、格助詞の前に立つことができる。

名詞句内部においては、名詞を修飾する形容詞は原則として主要部名詞の後に置かれ（N A）、限定詞は前置される（Det N）。数詞と類別詞がこの順で名詞句末尾に置かれる（N Num Ncl）。さらに、名詞句の末尾に、属格標識と同じ助詞 $r\Lambda$ が置かれることがある。この $r\Lambda$ は、あとの名詞を修飾するのではなく、名詞句がそこで終わることを示す。すなわち、名詞句の内部構造は (1) のようになる。

- (1) 指示詞 主要部名詞（形容詞） 数詞 類別詞 助詞 $r\Lambda$ [+格表示]

具体的な例を (2), (3) に挙げる。(2) では、主要部名詞 $\text{t\o}n\text{d}\text{o}3$ 「コップ」の前に指示詞が、後ろに数詞、類別詞、助詞 $=r\Lambda$ がそれぞれ現れる。この名詞句 ($\text{ŋoro1 t\o}n\text{d}\text{d}\text{o}3 \text{ sei}=\text{t}\text{c}\text{u}=\text{r}\Lambda 1$ 「あの三つのコップ」) がコピュラ文の主語になっていることから、類別詞 $=\text{t}\text{c}\text{u}$ の後に現れる助詞 $=r\Lambda$ が属格ではなく名詞句の末尾を表示

していることが確認できる。コピュラ文は主語に主格名詞句（ゼロ表示）を取るからである。(3)は形容詞を含む名詞句の例で、主要部名詞 *khembo3* 「かばん」の前に指示詞が、後に形容詞と類別詞が、それぞれ現れている。このように数詞を伴わずに類別詞が用いられると、数量が一であることを表す。

- (2) *ɲoro1 tondɔ3 sei = tɕʌ = rʌ1 ɲje = rʌ3 wa3.*
 あれ コップ 三 =NCL=GEN 1PL=GEN COP₁
 あの三つのコップは、私たちのだ (指示詞 名詞 形容詞 助詞 *rʌ*)
- (3) *ɲoro1 khembo3 tɕitɕi = jil*
 あれ かばん 大きい .RDP=NCL
 あの (一つの) 大きいかばん (指示詞 名詞 形容詞 類別詞)

2. 修飾構造

2.1. 形容詞句による修飾

前節で述べたとおり、名詞を修飾する形容詞は、主要部名詞の後に置かれる。このような名詞句内の形容詞は、副詞による拡張を受けて形容詞句になることが可能である。(4)では、主要部名詞 *ndɔ3* の後に、副詞を含む形容詞句 *maɥhimba3 hɣuɥɣu3* 「非常に良い」が置かれ、その後に類別詞が付加されている。

- (4) *ɲore = la1 ndɔ3 maɥhimba3 hɣuɥɣu3 = tɕʌ3 to-po-a1 re3.*
 3PL=DAT 馬 非常に よい .RDP=NCL NTL- ある -B.PFV SFP
 彼らは、非常によい馬を一頭持っていた。

なお、ダバ語の形容詞には、重複形と非重複形（単純形）があり、名詞句内に現れうるのは重複形式のみである。形容詞の重複は名詞化であり、形容詞重複形は(5)に示すように動詞の項になることもできる。一方、単純形は動詞接辞の付加が可能であるなど動詞的特徴を持つほか、比較文に用いられる (Shirai 2014)。

- (5) *ɲane3 no = wu3 hɣuɥɣu3 mɐ = ndu2.*
 1DU 2SG=ACC よい .RDP 作る = できる
 私たちはあなたにいいことをしてあげられますよ。

このことを踏まえて、再度、名詞を修飾する形容詞句の構造を考えると、次のようになる。(4)を例に取ると、副詞 *maɥhimba3* 「非常に」が形容詞 *hɣu3* 「よい」

を修飾し、その形容詞句 (ma^himba³ fi^u3) が重複によって名詞化された上で、名詞句内に置かれると考えるのが妥当である。すなわち、(1) の名詞句構造のうち「主要部名詞 (形容詞)」の部分は、(6) のように拡張可能である。

(6) 主要部名詞 [[形容詞句] 重複]

2.2. 節による修飾

この節では、名詞化された節による名詞修飾構造を扱う。このような名詞修飾節 (Adnominal Clause; AC) は、広義の関係節であると捉えることもできる。

AC を形成する名詞化標識は、節の末尾に付加される。AC は主要部名詞の前に置くことができるが、主要部名詞が明示的に現れない AC や、節の中に主要部名詞が現れる AC、つまり、主部内在型関係節に相当する形式も見られる。すなわち、ここで扱う名詞修飾構造は、次の 3 つのパターンに整理できる。

- (7) a. [[節] 名詞化標識] 主要部名詞
 b. [[節] 名詞化標識]
 c. [[主要部名詞を含む節] 名詞化標識]

2.2.1. 名詞修飾節を形成する接尾辞

生産的に AC を形成する名詞化標識として、いくつかの接尾辞がある。人および行為者を表す AC を作る -pi (例 (8), (14)), 物および対象を表す AC を作る -ma (例 (9), (10), (13)), 場所を表す AC を作る -hti (例 (11), (12)) などである。

これらの接尾辞によって形成される AC と主要部名詞の文法関係を、Keenan and Comrie (1977) の accessibility hierarchy に照らして整理すると、次のようになる。「関係節化」できるのは、主語 (8), 直接目的語 (9), 間接目的語 (10), 斜格目的語 (着点 (11), 場所 (12), 道具 (13), 随伴者 (14)) である。所有者および比較の対象を主部とする名詞修飾節は作れない。

- (8) ŋoro¹ peji³ htsa^Λ-pi³ fi^{ge}fi^{ge}3 ŋoro¹ re³.
 あれ チベット文 教える -NMLZ 教師 3SG COP₄
 チベット語を教えているあの先生は、彼だ。
- (9) tsheri a-mə-ma^Λ=ra³ lei³ ʈa^{çi}3 ki-ttsi=hce-a¹.
 PSN DWN- 作る -NMLZ=GEN 包子 PN INW- 食べる =PST-B.PFV
 ツェリが作った包子は、タシが食べた。
- (10) ŋa¹ lei³ ta^Λ-htsi-ma^Λ=ra¹ pa^{fi}ʈa³ ŋoro¹ re³.
 1SG 包子 NTL- 食べさせる -NMLZ=GEN 子供 3SG COP₄
 私が包子をやった子供は、彼だ。

- (11) ηje Δ -ji-hti2 satsa3 seitha3 $re3$.
 1PL UP-行く -NMLZ 場所 PN COP₄
 私たちが行った場所は、セータだ。
- (12) ηal hteime3 $m\theta$ -hti3 satsa3 jala3pinguã = $k\Delta l$ $re3$.
 1SG 結婚 作る -NMLZ 場所 ヤラ・ホテル=IN COP₄
 私たちが結婚式をした場所は、ヤラ・ホテルだ。
- (13) $\eta orol$ $ve3$ ki -ttsi- $m\Delta$ = $r\Delta l$ $nhazi3$ $koro1$ $re3$.
 3SG ツァンパ粉 INW-食べる -NMLZ=GEN 匙 これ COP₄
 彼がツァンパ粉を食べ（るのに使っ）た匙は、これだ。
- (14) $\eta je1$ $fido1$ seitha3 Δ -ji-pi = $r\Delta 2$ $co3$ $\eta orol$ $re3$.
 1PL 一緒 PN UP-行く -NMLZ=GEN 友達 3SG COP₄
 私たちが一緒にセータに行った友達は、彼だ。

2.2.2. 主要部が明示的に現れない AC

主要部なしの AC もしばしば見られる。この背景には、前節で述べたように、名詞化接尾辞の機能が分かれているということがある。たとえば、(15)では、「包子を食べた」を意味する節が、人を表す接尾辞 $-pi$ によって名詞化されているため、主要部名詞（たとえば、 $swil$ 「人」）がなくても、「包子を食べた人」を表すことができる。(16)は、(11)から主要部名詞 $satsa3$ 「場所」を削除した例である。このような主要部なしの AC では、名詞化標識 ((15)では $-pi$, (16)では $-hti$) が形式上の主要部となっている。

- (15) $lei3$ ki -ttsi- $pi2$ $\eta orol$ $re3$.
 包子 INW-食べる -NMLZ 3SG COP₄
 包子を食べた人は、彼だ。
- (16) $\eta je1$ Δ -ji-hti2 seitha3 $re3$.
 1PL UP-行く -NMLZ PLN COP₄
 私たちが行った所は、セータだ。

次の例では、名詞語幹 $\eta\Delta$ 「日」が小辞化されて、AC の名詞化標識の位置に現れていると考えられる。前節の (8) ~ (14) の例では、いったん接尾辞によって名詞化された AC の後に主要部名詞が現れるが、(17)では接尾辞がなく、節が直接 $=\eta\Delta$ と結びついている。ただし、この類例は少なく、今後の検討が必要である。

- (17) $\eta\text{orone}1$ $\text{hteime}3$ $\text{m}\theta=\eta\Lambda1$ $\text{a-fid}\theta\text{fid}\theta3$ $\text{hce-a}4$ $\text{re}3$.
 3DL 結婚 作る=日 DWN- 喧嘩 PST-RT COP_4
 彼らは、結婚式した日に喧嘩した。

2.2.3. 主部内在型名詞修飾節

ダパ語には、主部内在型名詞修飾節が見られる。これまでに見つかっている例を見る限り、意味上の主要部となるのは、名詞化された節内の動詞の直接目的語である。たとえば、(18) では、名詞化された節 $\eta\text{oro}1$ $\text{lei}3$ ki-ttsi ($-\text{m}\Lambda=\text{r}\Lambda$)1 「彼が包子を食べた (もの／こと)」が、主節の動詞 $\text{t}\Lambda\text{-htsi}1$ 「食べさせる」の目的語となっていることから、意味上の主要部が節内の名詞 $\text{lei}3$ 「包子」であることが分かる。(19) では、 $\eta\Lambda1$ $\text{ton}\phi\text{o}3$ $\text{a-t}\theta\text{ei}$ ($-\text{m}\Lambda=\text{r}\Lambda$)1 「私がコップを壊した (もの／こと)」がコピュラ文の主語となっており、意味上の主要部は $\text{ton}\phi\text{o}3$ 「コップ」である。これらの例では、主部内在型が主部外在型よりも好まれる。

- (18) $\eta\text{oro}1$ $\text{lei}3$ $\text{ki-ttsi-m}\Lambda=\text{r}\Lambda1$ $\eta\Lambda1$ $\text{t}\Lambda\text{-htsi}1$ $\text{hji}3$.
 3SG 包子 INW- 食べる -NMLZ=GEN 1SG NTL- 食べさせる PST.1
 彼が食べた包子は、私が与えたのだ。

- (19) $\eta\Lambda1$ $\text{ton}\phi\text{o}3$ $\text{a-t}\theta\text{ei-m}\Lambda=\text{r}\Lambda1$ $\eta\text{oro}=\text{r}\Lambda1$ $\text{re}3$.
 1SG コップ DWN- 壊す -NMLZ=GEN 3SG=GEN COP_4
 私が壊したコップは、彼のだ。

2.3. 名詞による修飾と所有表現

ここでは、名詞修飾要素が名詞である場合について述べる。

修飾要素の名詞が主要部名詞の所有者ないし所属先である場合、その修飾要素の名詞に属格助詞 $=\text{r}\Lambda$ が付加され、主要部名詞がそれに後続する。これは、分離可能・不可能を問わない。(20), (21) に例を挙げる。

- (20) $\text{no}=\text{r}\Lambda3$ $\eta\Lambda\eta\Lambda\text{pha}3$ $\text{fid}\Lambda\text{zi}=\text{m}\epsilon3$.
 2SG=GEN 姉妹 美しい=Q
 あなたの妹は美人ですか。

- (21) $\text{no}=\text{r}\Lambda3$ $\text{khembo}3$ $\text{l}\Lambda=\text{m}\epsilon2$.
 2SG=GEN かばん 重い=Q
 あなたのカバンは重いですか。

名詞に属格助詞 $=\text{r}\Lambda$ が付加された句は、主要部名詞がなくても、所有物を表すことができる。例えば、(2) の $\eta\text{je}=\text{r}\Lambda3$ 「私たちの (コップ)」や、(22) の「私

の（姉妹）」である。

- (22) koro3 neɤΛ=ne1 ɲa=rΛ3 rɛ3.
 この 姉妹=TOP 1SG=GEN COP₄
 この人は私の姉だ。(lit. この姉妹は私のだ。)

一方、修飾要素の名詞が主要部名詞の素材、関連特性など属性を表す場合、属格助詞 =rΛ が用いられず、単に両方の名詞が並置される。(23) では、修飾要素 ɲΛ1 「金」と主要部名詞 ɲkhazi3 「スプーン」が並置され、素材を表す限定修飾構造となっている。(24) の fideçi3 「チベット風のパン」と paɬΛ 「皮」も同様である。さらに、(24) の最初の部分では、修飾要素 tΛ3 「水」と主要部名詞 kolo3 「ティーポット」が並置され、ティーポットについて、水が入っているという状態を限定している。

- (23) htɕala=la3 ɲΛ1 ɲkhazi-tɕΛ3 po=t-ɛ3.
 PN=DAT 金 スプーン-NCL ある=IMPF-B.NPFT
 チャラ家には、金のスプーンが1つある。

- (24) tΛ3 kolo-pe=ntsha3 fideçi3 paɬΛ=nɛ=jantçi1 ma-tɕa=rɛ3.
 水 茶壺-NCL=COM チベット式パン 皮=二=しか NEG-ある=SFP
 水の（入った）ポットが1つと、パンの皮2枚しかないのだ。

限定修飾を行わない、同格関係にある名詞も、限定修飾の名詞句 ((23), (24)) と同様に、単に並置される。(25) では, swɛpi1 「牛飼い, 牧童」と johpu1 「使用人」が同格関係にある。

- (25) tʉrɛ=la3 swɛpi1 johpu-ji1 to-po-a=rɛ1.
 かれら=DAT 牛飼い 使用人-NCL NTL-ある-RT=SFP
 彼らには、牛の世話をする使用人がいた。

以上のことから、名詞による修飾を含む名詞句の構造は、次のようにまとめられる。

- (26) 所有： 名詞 属格助詞 =rΛ 主要部名詞
 限定／同格： 名詞 主要部名詞

3. まとめ

本稿では、ダバ語の名詞句と修飾構造について記述と分析を行った。ダバ語の名詞句は、次のような構造をしている。

指示詞 主要部名詞 数詞 類別詞 助詞 $r\Lambda$ [+格表示]

このうち、「主要部名詞」の部分は、修飾要素ごとに、次のように拡張可能である。

形容詞による修飾：

主要部名詞 [[形容詞句] 重複]

節による修飾：

- a. [[節] 名詞化標識] 主要部名詞
- b. [[節] 名詞化標識]
- c. [[主要部名詞を含む節] 名詞化標識]

名詞による修飾：

所有： 名詞 属格助詞 $=r\Lambda$ 主要部名詞
 限定／同格： 名詞 主要部名詞

略号

1	first person	IN	inside	PN	proper name
2	second person	INW	inward directional	PST	past
3	third person	NCL	noun classifier	Q	interrogative
ACC	accusative-dative	NEG	negative	RDP	reduplication
B	pattern B	NMLZ	nominalizer	RT	remote time
COP	copula	NPFT	nonperfect	SFP	sentence-final particle
DAT	dative-locative	NTL	neutral directional	SG	singular
DL	dual	OUT	outward directional	TOP	topic
DWN	downward directional	PFV	perfective	UP	upward directional
GEN	genitive	PL	plural		

謝辞

本稿で用いたダバ語メト方言のデータは、いずれも筆者の現地調査で収集したものである。主たる協力者は、ネグギェラモさん（女性、1945年生まれ）、その弟夫婦であるギェンツェさんとクックさん、親戚のタシチュンツさん、アギョさんらである。ここに記して深く感謝する。現地調査をはじめ、この研究は、次の研究助成によって可能となった：科学研究費補助金若手研究（B）「中国四川省西部の同系多言語社会における地域特徴解明のための言語学的調査研究」（平成23年度～26年度；課題番号：23720203）、科学研究費補助金基盤研究（A）「チベット語最古層の形成とその構造推移—データベース解析による辞書と歴史文法の編纂」（研究代表者：武内紹人；平成24年度～28年度；課題番号：24242015）。深く感謝申し上げる。

参考文献

- Gong, Qunhu [龔群虎]. 2007. 《扎壩語研究》（中国新發現語言研究叢書）. 北京：民族出版社.
- Huang, Bufan [黃布凡]. 1990. 〈扎壩語概況〉《中央民族學院學報》1990.4: 71–82.
- Huang, Budan [黃布凡]. 1991. 〈扎壩語〉戴慶廈, 黃布凡, 傅愛蘭, 仁增旺姆, 劉菊黃《藏緬語十五種》pp. 64–97. 北京：北京燕山出版社.
- Shirai, Satoko [白井聡子]. 2006a. 「ダバ語メト方言」, 中山俊秀・江畑冬生（編）『文法を描く—フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ—I』pp. 119–148, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Shirai, Satoko [白井聡子]. 2006b. 「ダバ語における視点表示システムの研究」(A study of the “point-of-view” system in nDrapa). Kyoto University dissertation.
- Shirai, Satoko [白井聡子]. 2010. 「ダバ語の格を表す形式」澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象1：格とその周辺』pp. 287–310. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Shirai, Satoko [白井聡子]. 2013a. 「ダバ語における文の下位分類」澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象2：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』pp. 391–421. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Shirai, Satoko [白井聡子]. 2013b. Mermaid construction in nDrapa. Tasaku Tsunoda (ed.) *Adnominal Clauses and the ‘Mermaid Construction’: Grammaticalization of Nouns* (NINJAL Collaborative Research Project Reports 13-01). pp. 341–370. Tachikawa: National Institute for Japanese Language and Linguistics.
- Shirai, Satoko [白井聡子]. 2014. Reduplication and nominalization in Tibeto-Burman. *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*. pp. 105–115. (<https://docs.google.com/file/d/0BZeLRjfEMUL-c3RQVjlnZWRRtM/edit>)